研修報告　AAWH シンガポール大会

―「高校生に教えるヒトやモノの移動の歴史－日本における実践と問題点－」（"Teaching Migration History to High School Students:Problems and Practices in Japan″）**パネルの報告－**

神奈川工業高等学校　**中山拓憲**

はじめに

2015 年５月 29 日から 31 日にシンガポールの南洋理工大学にてＡＡＷＨ（アジア世界史学会）が行われた。世界史研究推進委員会からは石橋功、澤野理、福本淳、神田基成、そして私、中山が大会に参加するために現地へ飛んだ。

ＡＡＷＨは 2008 年に設立された。この学会の目的は、ヨーロッパ中心主義に基づいた伝統的なアジアの歴史観を分析して評価しなおすことであり、また歴史における絶対的な「中心主義」を再構築して、アジアにおける「多くの中心」同士の相互の結びつきに基づいて形成された歴史の研究を深めることである。第１回が大阪、第２回が韓国ソウルで行われ、今回が第３回になる。第４回は中国長春の予定である。そこで世界史研究推進委員会のメンバーは、神戸女子大学の山内晋次先生、オランダ在住の飯岡直子さんとともに１つのパネルを担当することになった。

１、「高校生に教えるヒトやモノの移動の歴史－日本における実践と問題点－」（"Teaching Migration History to High School Students:Problems and Practices in Japan"）パネルの主旨

今回のＡＡＷＨでは 43 のパネルが３日間に渡って公開され、そのうち当パネルは、５月 29 日（金）13 時から 15 時までの 2 時間行われた。澤野（寒川）がまとめ役。石橋（ＮＰＯ）が司会。そして飯岡先生が討論者。山内先生（神戸女子大）、福本（栄光学園）、神田（鎌倉学園）（佐藤雅信の代理としての参加）の３名が報告者という形で行われた。

このパネルのねらいは日本の高校のカリキュラムにおける世界史と日本史の壁をなくす可能性の模索である。日本の高校においては、多くの生徒、教員とも、世界史は「日本以外の歴史を学ぶ科目」、日本史は「世界と関わりのない日本の歴史だけを学ぶ科目」と考えがちである。現在、大学の研究室からはその解決の糸口となるような新しい研究が生み出されているにもかかわらず、高校教員が新しい研究動向に触れようとしないことが、その１つの原因となっていることは間違いない。

このパネルでは「移民とそれに伴うモノと文化の流れ」に関する３件の報告を行うことで、高校の授業における日本史と世界史を結びつける試みについて示した。以下、３報告の概要を示す。

２、11 世紀から 16 世紀にかけての日本の硫黄の輸出と世界史（報告者；山内晋次）

この報告の目的は 11 世紀から 16 世紀にかけての日本の硫黄の輸出状況の推移を世界史の視点から分析することであるが、「日本の硫黄」というテーマは日本史と世界史の科目横断型授業に合致すると考えられる。中国への硫黄の輸出は、中国の商業網が大きく拡大した 11 世紀初頭の宋代に始まった。宋代は火器の使用がかなり拡大する時期であり、日本の硫黄は火薬の原料として用いられたと考えられる。北方民族の脅威に直面していた中国の軍事力を支え続けた。このことが「火薬革命」につながり 14～16 世紀の近世帝国の発展に大きく寄与する。

従来、火器というと鉄砲の性能などが研究の中心となってきた。しかし近年は原料に注目が集まっている。日本の戦国時代に使われていた鉛がタイ産であった可能性が高いということも分かってきている。火薬も含めて、火器の原料や部材の流通や支配について世界的な広がりの中で考える必要があ

ると考える。多くの硫黄を産出していたにもかかわらず、日本では 16 世紀まで火薬を作らなかった。この理由の解明は今後の課題である。この様に、硫黄に注目することで、日本だけでなく、アジアの海をめぐる中国、朝鮮、琉球との関係が見えてくると言えよう。

３、媽祖が日本に来た　－江戸における女神の船旅を追う（報告者；神田基成　考案者；佐藤雅信）

媽祖とは、東アジア海域で活動していた人々が信仰していた道教の航海の女神である。媽祖は「大交易時代」「倭寇」「琉球王国」「華人社会」を理解するための重要なキーワードである。

実は、媽祖が東日本に伝来した時期は、日本が「鎖国」を実施した時期である。「鎖国」とは幕府による海外との交流・貿易を制限する政策であったが、外国人やモノの流入は制限されていたとはいえ続いていた。同時代の東アジアも「海禁」といった政策が採られていた。明清交替期の中国本土の混乱の中、当時政治的安定を実現した日本に多くの中国人がやってきた。媽祖を東日本に伝えた人物は 17 世紀後半に日本へ亡命した東皐心越（とうこうしんえつ）である。彼は朱舜水とともに鄭成功の反清復明運動に加わったが、失敗した後に日本へ亡命してきた。徳川光圀は、中国文化の導入はもちろんのこと、当時の東アジアの情勢を的確に判断するためにもこれらの亡命者を受け入れた。

その少し前の 1671 年に開かれた、「東回り航路」が媽祖を東日本に広める上で大きな役割を果たした。磯浜天妃神社に東皐心越が持参した媽祖像が本尊として置かれた。ここから東日本にはその信仰が広まり、蝦夷地と水戸の間にいくつかの媽祖神社が作られていった。

幕末の尊王攘夷運動の中で、「異朝の神」とみなされた媽祖は、日本古来の海難救助の女神「弟橘媛（おとたちばなひめ）」神社に解消され、東皐心越が持参した像も撤去された。以上、媽祖の日本への伝来過程と同時代の東アジア世界における歴史的変動とのかかわりを明らかにすることで、高校における日本史と世界史をつなげる試みについて報告した。

４、横浜のチャイナタウンの成り立ちと移り変わり（報告者；福本淳）

1859 年、日米修好通商条約に基づいて、横浜は開港した。多くの外国人が、堀や川で周囲の陸地から隔離されていた、外国人居留地横浜に住み着いて商売を開始した。

日本より 10 年ほど早く開国した清国には、欧米の言語や商業習慣に通じたものも多くおり、日本人と漢字による筆談での意思疎通が可能であった。中国人が買弁（通訳、商取引の現場マネージャー、仲介者）として欧米人に同行して日本にやってきた。1877 年には 1142 名もの中国人がこの土地に住んでいたことがわかっている。中国人は欧米人との買弁だけではなかった。この中国人たちは、埋め立てが終了したばかりの「横浜新田」の跡地に集まって居を構えた。これが現在の中華街である。移民の発生原因を考える際に、本国からの push 要因と移住先からの pull 要因を考える事は有効であり、この横浜の中国人の事例にも当てはまる。中国人買弁が、この当時、本国でも買弁として活躍できる余地があったことを考えると、この当時は日本からの pull 要因が大きかったように思われる。

1860 年代後半になると、清の衰退、日清関係の悪化といった理由から中国人を軽んじる風潮が徐々に広がってくる。日本商人の成長も、それに輪をかけた。

1890 年代に日英通商航海条約を結び居留地が廃止され、中国人も職業をかなり絞った形で内地雑居が認められた。居留地貿易という形が成り立たなくなったため、中国人は買弁を続けることが困難になった。つまり日本の pull 要因がなくなってことを意味する。中国人は日本人客を対象にした中華料理店を作っていくことで状況に対応しようとした。

日中戦争は最大の試練であった。横浜中華街は、日中和解の可能性をさぐった汪兆銘を支持する声

が多かった。また戦後の中華人民共和国の成立、国民党政府との対立も衝撃を与えた。中華街の子ども達が通う学校も、中国共産党系の横浜山手中華学校と、国民党系の横浜中華学院に分裂した。

中華人民共和国と台湾の緊張関係は今も続いているが、1980 年代以降中華街では和解が成立し、一緒に中華街を盛り上げていく気運が強まっている。また日本との関係においても、1960 年代以降の高度経済成長、また 1972 年に日中の国交回復以降、日本人の中国文化への好意的な興味が広がったことが、中華街の活性化につながった。

移民として他国でマイノリティとして暮らすことは、理不尽な圧迫を受けることもあり、自身のナショナリズムを封印せざるを得ないこともある。しかし横浜中華街の人々は汪兆銘を評価したり、中華民国系と中華人民共和国系の人たちの協力関係の構築をしたりと、独特の国際性や洗練を身に着けたように思える。高校生はこの中華街の状況をみて「今なお中国本土と台湾の間では対立が残り、日本と中国の関係も不安がある中で中華街では中国人と台湾人が和解し、また日本人観光客も中華街を訪れている。」「友好関係は築けるという希望だと思った。」とうれしいコメントをくれた。

おわりに

以上、３つの報告があった。３つともに日本と外国（特に中国）との関係に焦点を当てた報告となった。筆者は次のような事を考えた。これらの３つのトピックは、今後、日本史と世界史の複合科目である歴史総合（仮）が作られた際には、積極的に扱うべきトピックになるであろう。ルネサンスの「三大発明(改良)」の１つになった火薬が、日本の硫黄を使って中国で生産されたことを知れば、世界史の中で日本が重要な役割を果たしたことを実感するだろう。日本の鎖国時代に、日本に亡命した中国人が日本の文化に影響を与えていることを生徒が知れば、従来の「鎖国」とは違うイメージを瞬時に持つだろう。横浜中華街という移民社会の中で、台湾・中国ではまだまだ成し遂げられていない和解がいち早く達成されていることを知れば、国際交流の大切さを実感するかもしれない。日本史と世界史をつなぐことで生徒の歴史イメージを変わるのではないかということを改めて実感できた報告であった。

今回の大会は、シンガポールという移民(特に華僑)が住む国での開催であり、そこに合致したパネルだったと思う。日本人以外の参加者も多い中、活発な質問がかわされた。報告者の神田先生が、シンガポールという様々な民族を抱える国でナショナルヒストリーを教えることに困難はないのか？」と質問し、それに対して「率直に言うと難しい。ただ様々な民族に考慮したナショナルヒストリーが作られており、今後は少数の民族にも考慮して内容を変えていくことが大切だ。」と答えが返ってきた一幕もあった。参加者として大変有意義な時間が過ごせたと思う。

［福本先生］

［神田先生］

［集合写真］